

Title	カナダのリドレス 20 周年 : ゴースタウン教員歴史協会の記録を中心に
Author(s)	小川, 洋
Citation	聖学院大学論叢,21(3) : 17-23
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=915
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

カナダのリドレス20周年

— ゴーストタウン教員歴史協会の記録を中心に —

小 川 洋

20th Anniversary of Japanese Canadians' Redress

Teaching in Canadian Exile by Frank Moritsugu and the Ghost Town Teachers Historical Society

Yo OGAWA

Soon after the Japanese Navy's attack on Pearl Harbor in December 1941, Japanese Canadians were sent to detention camps in the Rocky Mountains on the basis of alleged espionage and sabotage possibilities. At that time, the population of Japanese Canadians was about 22,000 and most of them were born in Canada and Canadian citizens. Several thousand school children were removed from public schools and sent with their mothers to detention camps (men of military service age were forced to go to various work camps). In 1988 Prime Minister Brian Mulroney signed an agreement with the National Association of Japanese Canadians for a formal apology and reparations. Around that time, more than a hundred Japanese Canadian women who taught youngsters in detention camps got together and started to write memoirs of their teaching experiences at the camp schools. *Teaching in Canadian Exile*, edited by Frank Moritsugu, was published by the Ghost Town Teachers Historical Society in 2000 as the fruit of their efforts.

Key words: カナダ, 日系人, 収容所, 教育, 第二次大戦

はじめに

第二次世界大戦中の日系アメリカ人たちの辛い経験については比較的よく知られている。日本海軍によるハワイ真珠湾攻撃が引鉄となり、国防上の理由から太平洋岸に住んでいた日系人たちはロッキー山脈の山中に強制収容されたのである。同じく敵国となったドイツ系およびイタリア系アメリカ人には行われなかった措置である。多くの日本人が明治時代からハワイやカリフォルニアを中心に、農業移民として移り住んだ。第一次世界大戦前後の黄禍論など、繰り返された人種・民族

差別による激しい排日運動に遭いながらも、持ち前の勤勉さと努力によって、日系人の多くはアメリカ社会で一定の地位を築き上げていた。しかし、彼らは突然、それらを剥奪されることになったのである。約12万人の日系人たちが家族ごと、砂塵の吹き荒れる荒涼とした山中に送り込まれた。一方で、日系二世の若者たちは、「祖国」アメリカへの忠誠を示すために軍に志願し、ヨーロッパ戦線で「華々しい戦果」を挙げたこともよく知られている。その多大の犠牲は、日系人に対する偏見を跳ね返す力となった。

アメリカほどには知られていないが、カナダでも日系人に対する同様の措置がとられたのである。日本が英米と交戦状態に入った時、カナダには約22,000名の日系人がいた。日本国籍の一世もいたが、すでにカナダ生れの二世の世代が中心となりつつあった。カナダ政府は太平洋岸から100マイル（160km）を「防衛ライン」として、この範囲に日系人が残ることを禁じたのである。当初は日本国籍をもつものが対象だったこの措置は、直ちに「日本人の人種的起源をもつもの」に広げられ、日系人コミュニティはほとんど根こそぎにされたのである。

2. 日系カナダ人の体験

しかしカナダの場合、いくつかの点でアメリカと異なる点があり、日系人の経験もいろいろな面で異なっている。第一に、もともとの移民の性格である。アメリカでは農業移民が多かったのに対し、カナダの西海岸のブリティッシュ・コロンビア州（以下、BC州）は農業に適した土地は余りなく、ロッキー以東の平原諸州を除けば農業の人手も求められていなかった。日本人の多くは、バンクーバー島の小河川と本土のフレイザー川流域で、秋に大量に遡上してくるサケの漁労に従事していた。自己所有の小さな漁船を操って、水揚げしたサケをカナダ人の缶詰業者に売って生計を立てるものが多かったのである。また漁民の多くは和歌山県人であった。アメリカに向かった日本人たちとは、出身地や定住傾向に大きな違いがあったのである。

第二に、カナダと日本の国家関係である。カナダはイギリス連邦の自治領として、1941年12月7日、日本に宣戦布告したが、カナダ兵が日本軍と交戦した場面は多くなかった。日本軍による香港占領時など、ごく限られていた。したがって、日本や国内の日系人に対する警戒心は、国民に広く共有されるには至らなかった。強制収容はアメリカでは軍が主導し、収容所の管理も軍があたったのに対し、カナダではBC州の一部の政治家たちの連邦政府への働きかけによって実現した。そのためカナダでは、さしたる態勢も整わないまま文民警察によって収容作業が進められた。

第三に、アメリカでは原則として日系人の財産が没収されることはなかったが、カナダでは連邦政府により没収されて売却された。売却して得られた資金を日系人の収容所内での生活費の財源として利用するという名目であった。そのためカナダの日系人たちは戦後、ほとんどゼロから出直さざるをえなかったのである。

第四に、アメリカでは家族単位での収容だったのに対し、カナダでは強制移動命令が出ると、一世と二世の兵役年齢の男子は家族から切り離され、ロッキー山脈の山中の収容施設の建設作業や各地の道路工事などに徴発された。強制移住の不当性を訴えて当局に抗議した一部の男性は、オンタリオ州にあった戦時捕虜収容所の施設に「収監」された。また日系二世がカナダ軍兵士になることは、大戦終期に通訳兵として使われたケースを除いて、なかった。

第五に、アメリカでは戦争の大勢が決まった1945年1月には、日系人の解放が始まり、元の住まいに戻った者も多かった。一方のカナダでは、日本の敗戦が濃厚となる1945年2月に、永住権のあった二世も含め、日本へ「帰国」するか、ロッキー山脈以東へ再移動するかの、いずれかを「選択」することが、政府に強制されたのである。1946年には数隻の船舶が用意され、4,000人が日本に「戻った」。カナダ生れの二世・三世たちにとって、それは「帰国」ではなかったのであるが。このため収容所の一部は、移送基地として1947年まで存続した。収容所に起源をもつ日系人子弟のための学校がオンタリオ州で最終的に閉鎖されたのは、じつに1952年であった。

3. リドレス運動と収容所内の学校教育の記憶

1980年代、日系人社会は連邦政府に対し、第二次世界大戦中の不当な扱いへの「謝罪と補償＝リドレス (Redress)」を求める運動を展開していた。この運動は隣国のアメリカ国内での動きにも連動しており、アメリカと同じく1988年、カナダ連邦政府マルルーニ首相は、日系人に対して、正式な謝罪と賠償金の支払いを約束する文書に署名した。なお、2008年はこの20周年にあたり、9月にはバンクーバーその他、日系人の多い都市で記念行事が行われた。

このリドレス運動のなかに、ヒデ・ヒョウドウ・シミズがいた。日系二世であった彼女は、戦前の日系人社会でもっとも知られた人物の一人であった。戦前のカナダでは二世の公民権は大幅に制限され、選挙権や公務員になる資格が認められていなかったのだが、彼女は偶然も手伝って、例外的に初等学校の正規の教員として採用されたのである。1942年に日系人の強制移動が始まったとき、彼女はすでに30代半ばのベテランの小学校教師であったが、自分の仕事を捨てて、収容所内の日系人のための学校教育に携わった。その経験と地位を利用して、当局と交渉しながら収容所内学校の運営に実質的な責任者として関わることになったのである。彼女は、教員の資格はもちろん教員になるための訓練もまったく受けていない20歳前後の女性たちを活用し、収容所の子どもたちに高い水準の学校教育を提供する原動力となったのである。

リドレス運動が最終局面を迎えつつあった1987年、元教員たちの同窓会がトロントで開催されることになっていた。ヒョウドウ女史は、その機会に当時の記録を集めようとし、元教員と元児童・生徒たちが手記を残す運動を起こしたのである。最終的には長短併せて数百の手記が集まった。多くの錯綜したさまざまな記憶からなるため、公式記録との照合や事実関係の確認など、多大な労力

を要する作業となり、出版されたのは2000年である。ヒョウドウ女史はゲラ刷りに目を通して、その前年に世を去っている。

本稿で紹介するのは、収容所内の学校の教師たちと児童・生徒だった人々がこのような経過のなかで書き起こした記録をもとにした”Teaching in Canadian Exile” (Frank Moritsugu and the Ghost-Town Teachers Historical Society, 2000) である。手記に描かれた場面の背景を解説する編集者の文章に導かれる形で、いくつかの公的連絡文書や当時の新聞記事などを含みながら、約150篇の手記がほぼ時系列に並べられ、第二次世界大戦中の日系カナダ人たちの経験が肉声に近い形で語られるものとなっている。

4. 収容所内学校

収容所には数千人の学齢期の子どもたちがいた。学校教育がどのように用意され運営されたのか、本書や研究書などから簡単に紹介しておく。カナダ政府としても教育の保障は課題として意識されていた。しかしBC州政府は日系人の問題について責任を負う姿勢がなく、対応は遅れがちであった。さらに強制移動が拙速であったため、移送は1942年の春に始められたにも関わらず、収容所の住宅と学校などの施設の準備は遅れがちであった。また1942年から43年にかけての冬は、現地でも数十年ぶりという厳冬となり、収容所の施設建設はさらに遅れた。

連邦政府は、西海岸一帯の小さな漁村などに分散していた日系人たちを山中に移送するため、中継基地としてバンクーバー市内のヘイスティング公園に仮の施設を用意した。ロッキー山脈中の収容所には、主として、すでに廃墟かそれに近い銀山などの旧鉱山町が利用された。収容所の学校が「ゴーストタウン学校」と呼ばれるのは、そのためである。家族によっては、ヘイスティング公園で数ヶ月を過ごし、42年の遅い秋になって移動したものも少なくない。子どもによっては一年以上、教育機会を失うことになった。しかし、日系人社会内部の動きは素早かった。ヒョウドウをはじめとする師範学校や大学の卒業者などを中心に、ヘイスティング公園でも教育活動が始められた。この段階で教職未経験者も積極的に協力している。この経験をもとに、ロッキー山中の収容所での生活が本格的に始まった43年初頭には、主要な収容所で授業が始まった。二百数十名の教員の大部分は女性の高卒者であり、大部分は未経験者であった。教会での日曜学校で子どもたちに読み聞かせをした程度の経験しかなかった20歳前後の女性たちが、この教育を支えたのである。子どもたちにとっては「お姉さん」程度の年齢差であった。

第一次世界大戦後、日系人の保護者たちは子どもをカナダの公立学校に通わせるようになっていたこと、カナダ政府が戦争終結後、日系人を分散させてカナダ社会に「吸収」することを目指していたこともあり、収容所の学校では、英語によるBC州の標準的なカリキュラムにもとづく教育が行なわれた。他の世界から隔絶され、将来がどうなるのか不明な状態に置かれた中で、同じ日系と

いう絆で結ばれた人々が、カナダの国旗とイギリス国王に忠誠を近い、カナダの国歌を歌い、授業の前には「主の祈り」を唱え、英語だけで授業をしたのである。

結果はどうだったか。戦後にオンタリオ州の公立学校に転校したある生徒は、「我々の先生たちは、厳しくやりすぎたのだ。私たちは普通の公立学校に移って、収容所内の学校より遥かにのんびりとした教育を受けた」と語っている。実際、多くの子どもたちは戦後、公立学校に戻って、優秀な成績を修めたのである。この一見頼りなく思える若い教師たちが与えた教育は、たいへん優れたものだったのだ。

元「教師」たちの手記には、彼女たちが使命感に燃え、真摯に誠実に、仕事に取り組んだ様子が、生き生きと描かれている。日々の教室での出来事をとおして、その特異な環境と条件のもとで、どのような教育活動が行われたかを窺うことができ、当時の日系人社会がどのように困苦を耐えたのかも知ることができるのである。この点からだけでも、本書は、近代の日系人移民の歴史に関心をもつもの、またカナダ現代史さらには移民や難民の教育問題について研究しようとする人々には欠かせない資料的価値がある。

5. 本書の意義

本書の意義について、整理しておきたい。なによりも第一に、第二次世界大戦中の日系カナダ人の子どもたちの教育という、今まではほとんど知られていなかった分野に、本書が光を当てる手立てを提供したことである。日系移民の歴史も、また第二次世界大戦中の日系人に対する一連の理不尽な政策についての研究もある程度は蓄積されてきている。しかし、若い二世と学齢期の子どもたちの生活に焦点を当てた史料や研究はひじょうに少なかった。本書によって、日系カナダ人の研究がさらに大きく発展する可能性が開かれたのである。

第二に、この収容所学校は世界的に見ても、ある種の壮大な「実験」であった。本書のお陰でその実験内容と肯定的な結果が詳しく紹介されることになったのである。同じ民族的出自の年長者があまり年齢差のない年少者を、閉鎖的な環境のなかで、移民先の国の標準的なカリキュラムで厳格に教育し、期待以上の学力・能力を養成することに成功したのである。この類例のない事例は、移民の教育問題を考えるうえで貴重な資料となるはずである。しかも多くが一次資料なのである。

第三に、日系移民の歴史という文脈からみれば、皮肉なことに、収容所学校の体験は、より多くの日系人が戦後のカナダ社会に溶け込み、活躍する機会を広げる原動力になったと考えられることである。日系移民の歴史研究に新しい視点を加えることになるであろう。日系人のなかには狭い日系コミュニティで生活している人も少なくなく、カナダ生れでありながら、あまり英語が話せなかったものもいた。しかし、大部分の日系人が収容所に入れられ、徹底して日本語が排除された。カナダの公立学校で12年程度の教育を受けた「お姉さん」にあたる人たちから英語で教育を受けた。収

容そのものは日系人にとって本来、屈辱的でありトラウマになる体験のはずであるが、その間に子どもたちが受けた学校教育は、彼らが戦後に飛躍する基礎となったと考えられるのである。実際、この学校教育を経験した教師や児童・生徒のなかから戦後、国際的に活躍する人々が育っている。日本とカナダの両国から勲章を授与されている建築家のレイモンド・モリヤマも収容所で生活し学んだ。彼の「樹上の家」のアイデアがなぜ生まれてきたのかを窺わせる、子ども時代の体験も語られている。またカナダを代表する作家ジョイ・コガワ、舞踊家・振付師のデービッド・トグリといった人物たちの多感な少年時代も、教師の記憶と本人の記憶によって語られている。

第四に、世代による収容所体験の意味の違いが明瞭に示されたことである。従来から、とくに低年齢の二世の子どもにとって、収容所体験は必ずしも悲惨なものと受け止められていなかったとは指摘されていた。太平洋に面した穏やかな気候・風土のなかで生活していた彼らが突然、標高数百メートルの山岳地帯の只中に移されたのである。子どもたちにとっては、刺激に満ちた新しい、必ずしも悪くはない環境と受け止められた。子ども側の手記に描かれた生き生きとした記述のお陰で、それがどのようなことだったのかが手に取るようにわかるのである。多くの手記が、春から夏にかけてのハイキング、初めて見る雪景色のなかでのソリ遊び、スキーやスケートに興じた思い出に触れている。女の子たちは、休日に地元の人に混じってベリー摘みに丘の上まで出かけて小遣いを稼ぐものもいた。一方で、高齢な一世の中には、移送中に体調を悪化させて死亡する例もあった。そもそも真珠湾攻撃にショックを受け、そのストレスから病氣や事故を招いた例も少なくない。彼らにとっては人生の最後が無念なたちで終わったのである。また大人になっていた二世にとっては、カナダの公立学校教育で教わり、信じていた人権などの民主主義の価値を、カナダ政府自身に裏切られたのである。その怒りは戦後、数十年を経て、リドレス運動につながった。移民の世代交代としては、日系人の場合、多少変則的な点があったものの、移民が世代交代をしながら、どのように受入れ側の社会に入っていくのか、という点では普遍性のある情報を提供してくれる。

第五に、学校が果たす教育以外の効果が示されていることである。阪神の震災の経験からも学校教育が地域の人々の生活再建にとって大きな意味をもつことが確認されている。子どもたちが学校に通うことによって大人たちも生活リズムを取り戻し、地域社会の立ち直りが促進されたわけであるが、これは収容所内の社会でも同様であった。茫然自失していた大人たちが、子どもが学校に通い始めるのと並行して、さまざまなサークル活動などを始めて、積極的に新しい環境に適応していったのである。多くの先進諸国で新自由主義的な教育改革が進み、教育の私事化が指摘されるなかで、学校教育の地域社会で果す役割を再確認することができるであろう。

第六に、今まではほとんど公的な記録も残っていないであろう、日系人のために活動したカナダ人側の人々の様子も書き留められていることである。例えば、聖職者による収容所の日系人へのさまざまな援助も、おそらくこの本によって初めて知られるところとなったのではないか。良心的兵役拒否者が日系人収容所でのさまざまなボランティア活動に携わっていたが、これらの人々の実際の

働きについても、政府側には記録が残されていないであろうから、この記録も貴重なものである。また1943年から45年まで、毎年夏にバンクーバー師範学校の協力によって、収容所の多くの教員がニューデンバーに集められ、一ヶ月近い研修（サマースクール）が行われた。師範学校の教員側の記録によれば、学生である日系人の若い女性たちの理解力の高さから、授業準備に追われたという。このような事情は、逆に日系人側には分からなかったことであろう。さまざまな立場の関係者たちの証言により、日系人たちの経験を多角的に見ることが可能になったのである。

6. おわりに

本書には現在の日本人が忘れてしまったような、日本人の原型ともいうべき姿が描かれている。また、かつての教員や児童の寄稿者たちから多くの写真も寄せられている。（カメラは保有が禁じられていたはずなのだが）。そこに見ることのできる日系人の姿は、高度経済成長以前の日本のそれである。経済大国となった現在の日本人は、豊かさや幸福を実感し享受しているかと問われれば、心許ないものがある。経済力に翳りが生ずると突然、奇妙なナショナリズムの高揚を示したりする。一方の日系カナダ人の二世・三世たちの多くは、多民族・多文化主義を掲げるカナダ社会に溶け込んでいる。とくに三世の間では、日系人以外との婚姻率は他の民族的出自のグループと比べても、ひじょうに高いものがあり、グローバル化した世界での生活基盤を確保しているものが多い。本書によって日系人の歴史を知ることは、日本人の可能性を考える新しい視点を与えられることになるのではないか。本書は現在、日本人研究者を中心とするメンバーによって日本語への翻訳作業が進められている。日本語版の出版が待たれる。

【主要参考文献】

- ・飯野正子他『引き裂かれた忠誠心：第二次世界大戦中のカナダ人と日本人』、ミネルヴァ書房、1994年。
- ・飯野正子『日系カナダ人の歴史』、東京大学出版会、1997年。
- ・佐藤伝・佐藤英子『子どもと共に五十年—カナダ日系教育私記』、日本出版貿易、1969年。
- ・新保満『カナダ日本人移民物語』、築地書館、1986年。
- ・日本カナダ学会（編）『新版 史料が語るカナダ』、有斐閣、2008年。
- ・マリカ・オマツ（田中裕介、田中デアドリ訳）『ほろ苦い勝利：戦後日系カナダ人リドレス運動史』、現代書館、1994年。
- ・ロイ・ミキ、カサンドラ・コバヤシ（佐々木敏二監訳）『正された歴史 - 日系カナダ人への謝罪と補償』、つむぎ出版、1995年。